

1866-1944



プロフィール		
慶応 2 (1866)年	高知県名野川村(現仁淀川町)で生まれる	
明治 19 (1886)年	高知市内の奉公先、傍士久次らの推薦により鈴木商店に入店	
27 (1894)年	店主の鈴木岩治郎が死去。柳田富士松と共に大番頭となる	
29 (1896)年	樟脳の空売りで失敗し大損する。3年後、台湾の樟脳専売制の成立に協力し、樟脳油の販売権の65%を取得	
35 (1902)年	合名会社鈴木商店に改組し、責任社員となる。同年、ハッカの製造工場を神戸市内に設立。翌年には現北九州市門司区に大里製糖所を建設	
40 (1907)年	大里製糖所を売却。得られた400万円の巨利は多角化戦略の資金源となり、3年後には直営6工場、2支店、8出張所体制となる	
大正 3 (1914)年	第1次世界大戦の勃発を機に、一斉買い出動の大方針を発する	
6 (1917)年	貿易年商は15億4,000万円に達し、日本一の商社に	
7 (1918)年	米騒動で本店が焼き打ちに遭う。同年、駐日米国大使、モリスと単独会見し、日米船鉄交換契約を実現に導く	
昭和 2 (1927)年	鈴木商店が倒産。翌年から整理業務に当たる一方、太陽曹達(現太陽鉱工(株))を持ち株会社化し、主家再興のため事業経営に乗り出す	
19 (1944)年	77歳で逝去	

日本一の企業へと導いた 伝説的商社の名番頭

商才をいかに発揮し 次々に事業を拡大

個人商店から出発し、瞬く間に日本一の年商を誇る総合商社へと成長した神戸の鈴木商店。大番頭として躍進を支えた金子直吉は、慶応2(1866)年、高知の没落商家に生まれた。生活は困窮し、12歳で奉公に出る。そこで読み書きやそろばんを覚え、質屋での奉公中には質草の本を片っ端から読みあさり、知識を蓄えていった。転機は20歳の時、奉公先の紹介で貿易商を営む鈴木商店に入る。明治27(1894)年に店主の鈴木岩治郎が亡くなり、その

妻、よねから実質的な経営を任せられると、積極的に事業を展開。防虫剤などに使われる樟脳の取引で一度は大失敗するものの、32年には副産物の樟脳油に着目。一大産地の台湾で販売権の65%を得るまでになり、店が飛躍するきっかけをつくった。

35年に鈴木商店初の直営工場として神戸市内にハッカの製造工場を設立したのを皮切りに、金子は工場建設にまい進する。資源のない日本が繁栄していくには工業と貿易の興隆が不可欠と、製糖、製粉、たばこ、ビール、人造絹糸、鉄鋼などさまざまな業種に進出。最盛期には傘下の企業は70社を超え、一大コンツェルンを形成した。

その流れをくみ、(株)神戸製鋼所、(株)帝人(株)などが今も企業活動を続けている。こうした行動へと彼を駆り立てた要因について、鈴木商店記念館編集委員の小宮由次さんは、若いころに神戸の居留地で経験した外国商館との取引を挙げる。「海外の技術や文化、知識をいち早く吸収したこと、進取の気性が育まれました。同時に、日本側には関税自主権がなく一方的な取引条件を強いられることが、国益志向の経営理念を生んだのではないのでしょうか」

産業のみならず 人材の育成にも注力

第1次世界大戦が勃発すると、世界的な需要の高まりを見越し、あらゆる商品の一斉買いの号令を掛ける。3カ月後、予想通り物資の大暴騰が始まり、大正6(1917)

年には鈴木商店の年商は当時の日本のGNPの約1割に当たる15億円を突破した。だが、株式会社化の遅れや直系の銀行を持たなかったことなどが災いし、金融恐慌のおおりに受けて昭和2(1927)年に倒産。関連会社は譲渡されたり自主再建を果たしたりと別々の道を歩むことに。その後、多くの元社員は財界や政界で活躍した。「金子さんは大きな戦略は緻密に考え抜いて自ら決めましたが、細かい部分は各社員に任せました。自由な風潮が優秀な人材を育てたのだと思います」。金子は常時5人程度の若者を借家住まいの自宅から学校に通わせるなど援助し、卒業後は鈴木商店で雇って世界を舞台に活躍させた。

店のため、国益のために一途に心血を注いだ彼の生涯は77歳で幕を閉じる。事業への意欲は衰えることなく、死の直前まで海外での新事業計画を練っていたという。

金子直吉 ゆかりのスポット

追谷墓園

神戸市中央区の錨山の麓に広がる公営墓地の一角、14区に鈴木一族をはじめ、金子や鈴木商店関係者の墓がまとまって立ち、絆の強さをうかがわせる。高台に位置し、市街地や神戸港を見晴らすことができる。

◎神戸市生活衛生課
TEL 078(322)5251
FAX 078(322)2725



祥龍寺

昭和初期に鈴木よねが再興した鈴木商店ゆかりの寺。神戸市灘区にあり、境内には巨大なよねの胸像のほか、金子や共に大番頭を務めた柳田の功績を顕彰する顕徳碑、物故社員を祭る辰巳会供養塔などが立っている。

TEL 078(881)6070 FAX 078(881)6100



晩年、相談役を務めた太陽産業(現太陽鉱工(株))の執務室での金子。



女流俳人だった妻の影響で俳句を愛し、多くの句を詠んだ。自ら称した俳号は、主家に献身的な家僕を意味する「白鼠」。

鈴木商店記念館

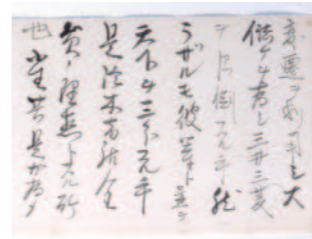


鈴木商店記念館 検索

鈴木商店ゆかりの資料や記録が散逸することを危惧し、元社員らによって昭和35年に結成された親睦団体「辰巳会」が中心となり今年4月にウェブ上にオープン。詳細な歴史や人物評、関連企業などの情報が写真や資料とともに紹介され、既に閲覧者は20万人を突破しているという。



※印はいずれも太陽鉱工(株)所蔵、神戸市立博物館保管



〔右〕後に「天下三分の宣誓書」と呼ばれる、金子が大正時代にロンドン支店長の高畑誠一らに宛てた手紙。三井、三菱と天下を三分することを旨指すと宣言した。〔左〕鈴木商店ののれん。屋号の「かね辰」の文字が大きく書かれている。